

保育実習における記録様式作成に関する研究

－記録の活用しやすさに関する質問紙調査結果から－

幸 順子

A Research to Construct a Record Style in Child Care Practices : A Questionnaire Study on the Usefulness of the Record Style

Junko YUKI

1. 緒言

今日、女性の就労率の増大、少子化や家庭の養育機能の低下などにより、保育への期待が高まっている。既に保育士資格が名称独占の国家資格として法定化され5年が経過した。認定こども園への移行に伴い、保育所保育指針が今年改訂され、保育所保育は、幼稚園の幼児教育と合わせ統合的視野でとらえることがますます必要になってきている。更に、幼児教育と小学校教育の連携、保育所・施設共に専門性の内容の高度化、家庭支援や外部の第三者評価導入の必要性など、保育の一層の充実が求められている。このような状況の中、保育士養成校においては、専門家として高い質を持ち、多様な保育ニーズに対応し得るだけでなく、現場において実践の研究を深め成長し続け、組織の一員として協働できる「反省的实践能力（実践を省察し、そこから学び探究しようとする能力）」を持ち合せた保育士の養成がますます期待されている。

保育実習は、国家資格として位置づけられた保育士の養成課程の中で重要な位置を占める。実習では全教科の総合的知識や技能の習得と実践応用力が必要とされるので、実習の事前事後指導の充実を図るだけでなく、実習施設の協力・指導を得て、実習施設・養成校・実習生が緊密に連携することが求められている。そして、実習を、学生自らが学んだ理論・知識を実践で確かめ、理論と実践の相互関係について体験的に気づける重要な機会にしていく必要がある。その気づきを促す一つの素材として実習記録が上げられる。現在、保育実習で使用する記録の内容・様式については、全国の各養成校においてまちまちであり、実習指導担当者に委ねられているのが現状である。

2. 目的

本学保育学科が2005年4月に開設されて以来、実習指導担当者として、本学科の教育目的及び内容を把握しつつ、新たな実習指導・記録の作成等を検討してきた。その過程において全国保育士養成協議会専門委員会より「保育実習指導のミニマムスタンダード」の試案が提案されたので、それも参考にしながら、実習記録として本学独自の創意工夫をし、保育所・施設と大

学で連携活用できる、保育実習、保育実習ⅡおよびⅢの実習手引きと実習記録様式一式の作成を試み^{1) 2) 3)}、これを2年間活用してきた。記録様式作成の際の目標としては、学生の主体的な学びや気づきを引き出し、保育所実習、施設実習で連携活用でき、学生のみならず実践現場にも活用しやすい記録用紙を作成することであった。今後、それらの活用のしやすさについて検証し、より有意義な実習指導として記録様式を活用できるように改善していくことが課題である。

本研究では、作成した記録様式の活用のしやすさと改善点について明確にするために、保育実習を終えた後、実習保育園の指導担当保育士と実習生を対象に質問紙調査を行った。^{4) 5)} 実習園の指導担当保育士と実習生の回答を合わせて考察し、作成した記録様式がどの程度有意義な活用ができるかという記録様式の有用性と、より良い教育や実習指導につなげるための改善点、必要とされる指導上の工夫などについて検討することを目的とする。

3. 方法

(1) 実習保育園の指導担当保育士を対象とした調査(調査1)

本学短期大学部保育学科1年保育実習1A終了後、実習保育園の指導担当保育士を対象に、「実習記録様式の活用し易さ」に関する質問紙調査を行った(図1参照)。調査対象とした様式は19種類(表1参照)。調査内容は、①各記録様式の活用し易さについての5段階評定(a活用し易い、bやや活用し易い、cふつう、dやや活用しにくい、e活用しにくい)、②評定理由についての自由記述、③各記録様式についての修正・改善案(記録用紙を添付し書き込み方式)から成る。調査期日は2007年2月19日～3月3日。調査用紙配布72件、回収数71件、回収率は98%であった。

(2) 学生を対象とした調査(調査2)

本学短期大学部保育学科2年生全員を対象に、すべての保育実習終了後、「実習記録様式の記入し易さ」に関する質問紙調査を行った。調査対象とした様式は21種類(表2参照)。調査内容は調査1と同様で、①各記録様式の記入し易さについての5段階評定、②評定理由についての自由記述、③各記録様式についての修正・改善案から成る。調査期日は、2008年1月。調査用紙配布80件、回収数80件、回収率は

1 各様式の実習状況の把握のし易さ、指導への活用し易さについて、当てはまるところに○印をつけ、その理由についてご意見を記入してください。

- <様式1>
- ① 活用しやすさ a b c d e
活用し易い やや活用し易い ふつう やや活用しにくい 活用しにくい
- ② 上記の選択の理由
- ③ ①のd、eに○印をつけた方は、下記の欄に赤ペンで修正案または改善案をご記入ください。

記入者 年 月 日	
実習園 施設名	実習日 年 月 日
実習の目標と取り組み	
1. 実習の目標	
2. 実習の記録	
3. 目標を達成するための具体的な方法や心得	
4. 実習への感想	

図1 質問紙調査用紙(部分)

100%。なお、調査1は、調査2の対象である実習生が最初に実習を行った園の指導担当者による回答である。

本稿では特に①、②の結果について取り上げ論じる。

4. 結果

(1) 実習保育園の指導担当保育士を対象とした調査(調査1)の結果

① 各記録様式の「活用しやすさ」についての5段階評価の結果

評価結果を表1に示す。様

式4、10、14、15で「無回答」の割合が高いのは、実習で使用される機会が無かったり、実習前後に学生と大学の間で使用する記録様式であるため目にする機会が無かったためと思われる。全体に「cふつう」と「a活用しやすい」、「bややしやすい」を合わせたものの割合が高く、活用しやすさは平均的以上であることが伺えた。様式1はaとbを合計した割合が45%で、cの48%と同等の割合で評価を受けており、記録様式全体の中でも最も評価が高く、多くの実習指導保育士が活用しやすさを認めていると考えられる。様式12『見学・観察実習用記録用紙』、13『参加・指導実習用記録用紙』もそれぞれaとbを合計した割合が38、35%、cが各38%で、比較的高い評価を受けていると考えられるが、一方で、「dやや活用しにくい」と「e活用しにくい」を合計した割合がそれぞれ15%、14%と、他の記録と比較すると割合が高く、評価者の考え方により評価が両極に分かれると考えられる。この2つの記録様式は特に日々使用するものであるだけに、「活用しにくい」理由について十分検討する必要があると思われた。なお、11『実習するクラスの様子』、様式14『子どもを見つめて(個人の記録)』、16『指導案』にも同様の傾向が認められた。

評価の高い様式や、評価が分かれる様式は、本学なりの特徴が強く存在することや、あるいは評価者の考え方にばらつきのある領域であることなどがそのような評価になった理由として考えられる。

表1 記録の「活用しやすさ」に関する実習園への調査結果(数値は%)

様式	内 容	a%	b%	c%	d%	e%	NA%
1	実習の目標と取り組み	34	11	48	0	0	7
2	実習生個人票	30	4	55	1	0	10
3	実習出席簿	25	8	54	1	0	11
4	実習指導訪問連絡用紙	14	6	49	1	0	30
5	実習までの履修状況表	15	8	59	4	0	13
6	実習園での事前訪問の記録	18	7	58	1	0	15
7	実習予定表	18	11	51	7	1	11
8	実習園概要	18	4	61	3	1	13
9	実習園の周囲の環境	15	8	61	3	1	11
10	欠席届	21	6	51	0	0	23
11	実習するクラスの様子	20	10	51	10	0	10
12	見学・観察実習用記録用紙	24	14	38	16	0	8
13	参加・指導実習用記録用紙	24	11	38	11	3	13
14	子どもを見つめて(個人の記録)	10	13	42	14	1	20
15	自由記録用紙	8	3	48	3	0	38
16	指導案	20	4	49	10	0	17
17	実習を終えて	23	8	58	1	0	10
18	実習反省会の記録	20	6	54	4	0	17
19	実習園関係資料	4	6	49	3	1	37
20	大学での保育実習指導ノート	—	—	—	—	—	—
21	報告書	—	—	—	—	—	—

a 活用しやすい, b ややしやすい, c ふつう, d ややしにくい, e 活用しにくい, NA 無回答

② 評定理由についての自由記述の結果

i. 様式1『実習の目標と取り組み』

この様式は実習に入る前の実習計画を記述するものであるが、内容は、『実習の動機』、『実習の目標』、『目標を達成するための具体的な方法や心構え』、『実習へのお願い』の4つの下位項目から成る。意見としては、「項目がしっかり分かれていて見やすい」といった、項目に分けて分析的に記述する表記法への評価的な意見や、「実習生の実習への意欲や心構え、どのような気持ちで臨んでいるかが分かってよい」、「実習の目標がよく分かり、指導する方もポイントを押さえやすい」など、指導する側から見た学生の考えや気持ちの把握しやすさについての意見以外に、「実習に対する本人の気持ちや取り組み方がきちんと整理できると思われる」、「学生にとっては4つの項目があることで実習に対しての心構えができると思う」など、実習生の立場に立って見た場合にも実習への取り組みの明確化に役立って良いという意見が重複して見られた。ただし、自由記述の中での指摘にもあったが、「保育実習（必修）」で使用する場合は、必修科目であるため『実習の動機』という表現はそぐわない。『実習に対する意欲や思い』等の表現に改めた方がよいと思われた。

ii. 様式5『実習までの履修状況表』

「履修状況が把握できてよい」という意見と、「園としては特に必要ない」、「見せてもらわなくてよい」という意見の二つに大きく分かれる。二つの意見の中間的な意見として、「様式に示された限りでは専門科目の詳しい内容までは分からない」とか、「実習生が実習を通して専門科目をどう活かすかにかかっている」という少数意見もあった。いずれにしても、この記録様式を十分に活かすためには、実習指導において活用の仕方を実習生や園によく説明し、理解を促すような配慮や工夫が必要である。それと同時に、学科の各教科担当が全体として、大学での学習が実践でどのように生きるのかを意識して日々の教育を行っていく必要があるし、教員同士がそうした共通認識を持つことが必要であると思われた。

iii. 様式12『見学・観察実習用記録用紙』および、様式13『参加・指導実習用記録用紙』

これらは、日々活用する記録様式である（図2参照）。内容の下位項目としては、その日の『実習のねらい』と、時間軸に沿った『環境構成』、『子どもの活動』、『保育者や実習生の活動や援助』などの項目以外に、『実習生の感じたこと・気づいたこと・考察したこと』と『本日の実習から学んだこと』、『一日全体の反省及び課題』など、各自の内的体験についての記入欄がある（図2参照）。二階堂（1999）⁶⁾、小林ら（2006）⁷⁾に見られるように、一般的には日々の記録様式の中に内的体験を記述する欄まで作られていないことが多いようであるが、相馬・中田（2004）⁸⁾の記録様式は本学の形式に類似しており、『実習生の動きと気づき』の欄を設けている。

本研究の様式の作成に当たっては、実習生の気づきや学びが十分に記入できるようにという配慮から、これらの内的体験の欄を大きめに取ったのが特徴的である。実習園の保育者の意見としては「『感じたこと・気づいたこと・考察』の欄で実習生が何をどのように見て、感じているかがよくわかる」、「『感じたこと・気づいたこと』を書くことは実習のねらいが明確になり、自分への気づきができてよい」、「『学んだこと・反省・課題』を記入することではっきりと次の課題が見えてくるので良い」、「『感じたこと』の欄で実習生が項目を起こして書いていたので、実習生の関心がどこにあったか分かりやすかった」、「『感じたこと』の欄を大切にしたい」という意見がある一方で「『感じたこと・気づいたこと・考察』の欄が十分理解され活かされていない」、「実習生が『感じたこと・気づいたこと・考察』の書き方を理解

様式13 表				記入日 年 月 日				様式13 裏			
参加・指導実習用記録用紙				年 組 番号				時間			
氏 名				氏 名				環境構成			
指導者印				印				子どもの活動			
月 日 曜日 天気				指導者印				保育者(指)・実習生(実)の活動及び経験			
実習のねらい				実習のねらい				実習生の感じた事、考察した事			
組 児童 名				出勤: 時 分 ・ 退社: 時 分							
保育のねらい (主な活動)				実習生の感じた事、考察した事							
時間	環境構成	子どもの活動	保育者(指)・実習生(実)の活動及び経験	実習生の感じた事、考察した事							
								本日の実習を終えて			
								本日の実習から学んだこと			
								一日の全体の反省及び課題			
指導・所見				記入者名							

図2 様式13『参加・指導実習用記録用紙』

していなかった」、「『感じたこと・気づいたこと・考察』は、だらだら日記のように書いていただけなので、『学んだこと・反省』の欄に含めた方がよい」という意見もあり、実習生の理解や力量の差が現れやすい項目であることが示唆された。これらの項目の意義が十分理解され、活かされるように指導上の工夫をしていく必要がある。『感じたこと・気づいたこと・考察』や『学んだこと』に表された記述は、実践のその場その場における実習生自身の心の内面を映し出すものであり、子どもや保育者の心の内面に対する「気づき」や「学び」を表すものでもある。単に書き方のテクニックの問題ではなく、保育の本質を一人一人の実習生がどれくらい理解しているかを示すものである。それだけに日頃の学習の中で、自分自身の内面の「気持ち」、「気づき」、「学び」について意識化し、表出する自己課題にどれくらい取り組めるが重要になる。

また、様式12と13の区別に関しては「一本化した方がよい」、「活用の仕方の違いを実習生が十分理解できていなかった」という意見もあった。実習生への負担について配慮し、様式を工夫して一本化するとともに、一方で、見学・観察実習と参加・指導実習の目的の違いを明確にし、記録の際の着眼点の違いについても十分に理解できるような指導を行って行く必要があると思われる。

iv. 様式14『子どもを見つめて(個人の記録)』

この記録の意図としては、一度に大勢の子どもに接し、その場その場での子どもの様子や子どもによる個性の違いに目を奪われがちになる実習生に、一人の子どもの日をおっての変化やその子どもとの関わりの変化、更にその子どもを中心とした関係の広がりにも目を向けてもら

い、子どもの理解をより深めてもらおうというのがねらいである。こうした視点を持つことにより保育というのは日々の積み重ねであり人と人の関わりそのものであることにも気づくことができる。

実習園の保育者の意見としては「子どもを理解するための記録として1人の子どもをよく観察し記入できてよい」とか「どういう目的でその子どもを記録するのかを明確にするとよい」という前向きなものもあったが、「短期間の実習で子どもを把握するのは難しい」、「何を視点に『見つめる』のかを事前に十分話し合うことが難しい」、「実習としてそこまで必要だろうか」、「実習生に負担」などの意見が多く、こうした記録を活用するには視点設定や記録の仕方について指導上の工夫がかなり必要とされることが示唆された。

以上個々の様式を取り上げて述べてきたが、記録様式についての意見を全般的に見ると、主に『実習記録が園の子ども理解や保育に役立つ』という視点からの指摘や、『実習生の指導上利用しやすい』という視点からの指摘、さらに『実習生の学びにとっての有用性』や『実習生にとっての(内容的、形式的な)書きやすさ』など、大きくわけて4つの視点からの指摘が結果的になされていたことが伺える。その具体的な内容としては、「よく考えられ、しっかり作られている」、「現場の保育士にも参考になる」、「詳しく一目瞭然で見やすく分かりやすい」、「細かく記入するようにそろっており本人にとっては理解を深めるために役立つと思われる」、「理解して記入すればとても成果が上がると思う」等、評価的な意見もあったが、一方で「記入の仕方について実習生自身がよく理解できていない」や、「記録用紙の種類が多い」、「項目を絞りもう少しシンプルにした方がよい」、「実習という慣れない環境での疲れを考えると、記録が多く実習生にとっては負担が大きいと思われる」といった意見が多く見られ、記入の仕方について指導を工夫する必要性や、実習生の力量を再考し改善する必要性が示唆された。実習記録は、「実践の認識」に大きな役割を果たすものであるが、大学が学問的専門性を発揮し、単に実習生にとってだけでなく、実習園にとっても意義ある記録となることを考慮しつつ、初心の実習生に十分活用しやすい記録や指導をいかに工夫していくかが課題である。

(2) 実習生を対象とした調査(調査2)の結果

① 各記録様式の「記入しやすさ」についての5段階評価の結果

まず、実習生を対象とした各記録様式の記入しやすさについての5段階評価結果を表2に示す。様式12、13、以外は「cふつう」以上が50%以上であり、記入しやすさは平均的かそれ以上であることが伺えた。その中でも様式7、8、11、14、15、16以外は、は、「cふつう」以上が80%以上であり、多くの学生が平均的以上の記入しやすさであると判断している様子がうかがえた。しかしながら一方で、実習園の結果と比較すると、「dやや記入しにくい」または「e記入しにくい」の割合が高く、一部の学生は記録の記入に困難を抱えていることが分かった。中でも様式11、12、13、14は「dやや記入しにくい」または「e記入しにくい」のどちらかに回答した学生の割合が比較的高く、特に、様式12、13は、日々使用する記録にもかかわらず70%以上の学生がdまたはeに回答していた。同様の傾向が様式11、14にも当てはまり、記入しにくさを訴えている学生が30%前後あることが分かった。

表2 記録の「記入し易さ」に関する実習生への調査結果（数値は%）

様式	内 容	a%	b%	c%	d%	e%	NA%
1	実習の目標と取り組み	13	11	65	11	0	0
2	実習生個人票	29	8	58	6	0	0
3	実習出席簿	39	6	54	1	0	0
4	実習指導訪問連絡用紙	18	15	58	10	0	0
5	実習までの履修状況表	16	6	61	14	3	0
6	実習園での事前訪問の記録	21	15	58	6	0	0
7	実習予定表	14	16	45	16	9	0
8	実習園概要	11	13	54	21	1	0
9	実習園の周囲の環境	11	11	60	16	1	0
10	欠席届	20	3	70	0	0	8
11	実習するクラスの様子	9	6	54	25	5	1
12	見学・観察実習用記録用紙	1	3	24	45	27	0
13	参加・指導実習用記録用紙	0	5	20	46	29	0
14	子どもを見つめて（個人の記録）	9	3	61	20	8	0
15	自由記録用紙	4	4	49	17	14	12
16	指導案	13	11	55	19	2	0
17	実習を終えて	11	8	75	5	0	1
18	実習反省会の記録	9	9	77	5	0	0
19	実習園関係資料	19	5	70	1	3	2
20	大学での保育実習指導ノート	18	5	76	0	0	1
21	報告書	9	9	75	6	0	1

a 記入しやすい, b ややしやすい, c ふつう, d ややしにくい, e 記入しにくい, NA 無回答

② 評定理由についての自由記述の結果

i. 様式11『実習するクラスの様子』

学生の5段階評定の評価は低かったがその理由を見ると、ほとんどの学生が「『クラスの目標』について記述すべきことがよくわからない」という理由をあげていた。具体的には「その日の目標なのか、週間か、月間か、年間の目標なのか」、「園の目標なのか自分の目標なのか」分りにくいというものであった。それ以外に、「クラス目標はない」とか「保育のねらいがあるから必要ない」などというコメントも僅かだがあった。これらから、記録の形式的な側面に関する改善策として、何を記録するかが明確になる様なタイトルに変更する必要があることがまず明らかになった。それと同時に、記録の指導について学生の理解に差異があることや、根本的には、この記録様式の意図（記録を通じて何を理解しようとするのか）が十分に理解できていないという可能性があることが伺えた。それゆえ、なおのことタイトル表現の表面的な側面に反応するのであろう。従って、記録の記入に関する内容的側面の課題として、それぞれの記録様式の意味と目的を十分に知らせる必要性をがあることが示唆された。

ii. 様式12『見学・観察実習用記録用紙』および、様式13『参加・指導実習用記録用紙』

まず最も多く見られた記述は記録の形式的記入しにくさについての問題であり、「様式12と13は分ける必要がない。ほとんど参加実習だから」と言うものである。自分自身の行っている実習がどの段階であるかを自覚できるようにという配慮から記録を二つに分けたが、これらを一枚の記録にし、どの実習にも対応できる形式にするのが妥当と判断された。

「各活動についての『感じたこと、気づき、考察』の欄が多い」、「『感じたこと、気づき、考察』と『本日の実習から学んだこと』、『反省』は重複するので、まとめて一つにして欲しい」、「『保育者の活動と援助』と『感じたこと、気づき、考察』が重複するのでどちら

か一方にして欲しい」、など、自分自身の内的体験を振り返ったり、他者が何を感じ考えて行動したかという内面を他者の様子から推し量ったりすることが難しい様子がうかがえた。更に「『感じたこと、気づき、考察』の欄は、『保育者の援助はどういう考えで行われているか』というのが分かりやすいタイトルにして欲しい」という意見もあり、（この表現からは）着目すべきことが何かよくわかっていないという様子も伺えた。また、一方で「『子どもの活動』と『保育者の活動と援助』の欄が狭い」、「『援助』の欄は自分が得られるものだと思うので細かく書けるようにして欲しい」など、保育者の保育・援助技術のノウハウや行動として現れている「事実」の側面に注目することに力を入れている様子が伺えた。つまり多くの学生が日々の保育活動について、行動上の「事実（エビデンスevidence）」を重視し、『感じたこと、気づいたこと、考察』などの「そこ（自己や他者）にいったい何が起こっているか」という内的体験を記述すること（ナラティブnarrative）」に意義が十分見いだせず、また表出することに困難を感じていることが明らかになった。ただし、極少数であるが、「重要なことは、関わりを通して学んだことをたくさん書いた方がいいらしい」とか「保育者の援助について先生の思いを読み取って書くように言われて大変だった」、「『感じたこと、気づき、考察』の欄は、『保育者の援助はどういう考えで行われているか』というのが分かりやすいタイトルにして欲しい」、「『感じたこと、考察』の部分が多いのは良かった」など、実習を通して内的体験の振り返りの重要性を学んだと思われる貴重な意見もあった。

実習園とこれらの実習生の調査結果を踏まえて作成した様式12、13の改訂版を図3に示す。

様式13 改訂版 表				記入日 年 月 日		様式13 改訂版 裏				
観察・参加・部分・指導実習用記録用紙				名古屋女子大学経済学部 保育学科		時間	環境構成	子どもの活動	保育者(園)・実習生(実)の活動及び援助	実習生の感じた事・気づいたこと・考察した事
月	日	曜日	天気	氏名						
実習のわらい				指導者印						
園				園児 名		出勤: 時 分		退園: 時 分		
保育のわらい (主な活動)										
時間	環境構成	子どもの活動	保育者(園)・実習生(実)の活動及び援助		実習生の感じた事・気づいたこと・考察した事					
<div>本日の実習を終えて</div> <div>本日の実習から学んだこと、一日の全体の反省及び明日の課題</div> <div>指導・所見</div>										

図3 様式12、13改訂版『観察・参加・部分・指導実習用記録用紙』

iv. 様式14『子どもを見つめて（個人の記録）』

「自分で考えて自由に書けるのが良かった」という少数意見もあったが、「一人の子どもばかり観ていられず書けない」、「個人を観る余裕がなかった」という意見がほとんどだった。更に、個人の記録を書くことを保育園では好ましく思っていないようだという意見も少数あった。一人の子どもの継時的変化に注目するというのは、必ずしも一人の子どもに張り付かなくとも、関わりを持った時々の一つ一つの体験を大切にすることで、毎回小さくても新たな気づきは得られるものである。しかしながら、そもそも自らの内的体験を感じ取るということが十分実感として理解されていないのと、初心の学生にとっては目の前の課題をこなすのに精一杯であり、こうした発展的（と実習生には思われる）課題に取り組む以前の問題がある様子が伺えた。

保育というのは、漠然とした多数の子どもを相手にしているのでは決してない。大勢の子どもとかかわっている時も、保育者の中では、一人ひとりの子どもの個性と日々の変化や成長の様子が捉えられ、そして働きかけ（保育）をする。したがって、一人ひとりの子どもをどれ程しっかり捉えられるかが保育の質を左右するし、その意味で個人の記録は保育の原点であると言ってもよい。しかし、初めての実習において早速大勢の子どもと関わりクラス全体を観る視点を要求される初心の実習生には、こうした一見相矛盾する課題をこなすことはかなりの困難を伴うようである。これは、実習園の担当者の調査結果と呼应していた。学生の負担を少なくし、なおかつこの記録の意図するところを学生に理解させるためには、子どもについて印象に残ったこと気づいたことを、たとえ一行でもよいから日々書きためて、そこに浮かび上がる子どもの姿について考えてみるといった活用の仕方を事前に体験学習できると良いかもしれない。

以上、実習生の自由記述の結果について個々の様式を取り上げて述べてきた。記録様式についての実習生の全般的な意見としては、主に『形式的な記入しやすさ、しにくさ』や『内容的な記入しやすさ、しにくさ』、更に少数であるが『学びについての有用性』という、大きく分けて3つの観点からの指摘がみられた。具体的には、形式的・内容的に「日々使用する様式12、13が記入しにくい」という意見が一定数あったが、他の様式は形式的にも内容的にも比較的記入しやすいと感じていることと、記録様式の多さに関しては、「最初の実習では大変だったが、慣れるにつれ要領よく記入できた」などという感想もあり、実習園の担当者の心配とは裏腹に意外にも予想したより負担感は少ないことが分かった。

5. 考察

特に課題が明らかになった様式12、13について考察する。

（1）『感じたこと、気づき、考察』などの内的体験を記述することの意味

保育者を目指す学生の教育に携わり感じることは、2年という短い期間で「保育とは」という本質に足を踏み込んでもらうことはなかなか難しいということである。それでも多くの学生は実習を通して子どもとかかわり、保育の楽しさ・おもしろさ・魅力を肌で感じ、また保育者のあり様に触れ、保育という営みの尊さ・厳しさ・難しさも察していることであると思う。しかし「子どもの内面の理解」の教育を専門とする心理学の教員としては、更にもう一歩踏み込んで学んでもらいたいと願うことがある。

現実の実習では、短い期間に学生は保育の実践者として機能することを求められる。必修の保育所実習ではほとんどの学生が2週間の実習の終わりに一日の部分ではあるが、担任の代わりに保育者の役割を引き受け、一人でクラス子ども達に対するいわゆる「部分保育」を行うことを課題として与えられるし、後の選択必修の保育所実習2では多くの学生が同じく2週間の実習の終わりに、一日の指導実習(担任に代わって1日の保育の責任を負い引き受ける)を行う。そのため、ほとんどの学生は自分に課せられたこの課題をいかにうまくこなすかということに多くのエネルギーを費やすことになる。つまり、実践者として自分が何をするか、どう振る舞うか、つまり実践者を「実演すること」に関心の焦点が当てられている。そのため、その場その場の保育場面での「保育技術」の問題にもっぱら関心の矛先が向き、そもそも実践から何を学ぶのかという現実的な問題の背景にある保育の本質的問題にまではなかなか心が及ばないというのが学生の実情ではないだろうか。理想を高くし厳しい見方をすれば、2年間という短い学びの期間にあって、ともすると学生は「技術」イコール「保育」と思い込みがちになっているようにも思われる。学生は様式1『実習の目標と取り組み(実習計画)』において「保育者から学びたい」とよく記しているが、「実践に学ぶ」と言ってもただ単に他人の実践(の技術)をまねることはあまり意味がない。肝心なのは他者の実践から何を読み取るかということである。その実践が置かれた条件と自分の置かれた条件との違いを理解し、どこを工夫して自分の実践に取り入れるのかを考えなければ学びとはならない。⁹⁾ そうした意味で、ここで敢えて考えて欲しいのは、「技術」が「保育」なのではないということである。保育というのはそもそも一人ひとりの子どもの理解の上に成り立つものであるし、そうした理解の上に、保育者の子どもへの働きかけ(実践)がある。実習指導担当者としては、どういう「理解」がその「実践」を生み出したのか、そのことに少しでも気づいて欲しいという願いがある。

宮里・古庄(2006)⁹⁾は、保育現場の実践者の学びの課題として、受け身的に「講演」や「実技講座」に参加する以上に「実践を検討する」ことの重要性について触れ、その「実践的研究」の一つの方法としての「実践記録」に注目している。研究の出発点は「保育者の悩み」であるとし、保育者の「悩みを相談するつもり」で子どもと保育者の具体的なやり取りの一場面を記述することの意義について指摘している。それを「記録から子どもが見えてくる様なストーリーのある」実践記録とも言っている。そこで重視されるのは、子どもの内面や行動の意味を深めることだけでなく保育者の子どもへの働きかけ(関わり方)と「思い(内面)」を記述することである。保育を深めるためには、どう働きかけるかだけでなく「なぜそのように働きかけたか」という「保育者の心の内を意識化」することが大切であるとしている。そうした「記述」は同時に「自己省察」であり、専門家としての「目的意識的な保育」につながるものであるからである。

ショーン(1983, 佐藤・秋田訳(2001))¹⁰⁾は、こうした実践的研究方法(技法art)を「行為の中の省察(reflection-in-action)」と呼び、教育や福祉の専門家の専門性として不可欠なものであることを示唆し、そうした「知」に基づく専門家を「技術的熟達者(technical expert)」を超えた「反省的实践家(reflective practitioner)」という新しい専門家像で示している。また、中村(1992)¹¹⁾も実践研究に関する同様の視点について述べている。

現実振り返ってみて、実習終了後の学生の記録を見ると「実行したこと」、「できたこと」、「理解したこと」の記述は比較的多いが、「できなかったこと」、「分からなかったこと」、「疑問に思ったこと」の記述はどちらかというと少ない。実際、実習生の指導訪問の際

いと考えていることが伺えた。つまり「反省的実践家」としての保育者を育むことの意義や方法について、実践の場の保育者の反応から確認することができたと言えるであろう。

（2） 気づきの得られる実習のための実習記録指導の工夫について

記録の記入しやすさ、しにくさについての個々の学生の評価は、実際に実習を行い、使用した後でないと明らかにならない。本来は最初の実習が終わった後に、記録についても十分な振り返りをし、次の実習までに自己課題を明らかにして備え、新たな実習に臨む必要がある。しかし、現実には短い時間に多くの実習をこなさなければならないので、実習指導者の意図とは別に、より学生にとって関心の高い、部分実習や指導実習などの保育場面での保育技術の問題に学生自身の振り返りの焦点が当てられがちになる。そのため、何に注目して記録するのかといった、現実的な問題の背景にある記録の意義（理論と実践の統合）について振り返る余裕はなかなかないのが現状である。

記録に関する実習の事前指導としては、まず、「実習記録」とともに作成した本学の「実習の手引き」³⁾に沿って実習の目的・目標・ねらいを確認している。それを踏まえ、記録様式を一つ一つ取り上げ、それぞれの記録の意図する目的と、実際の保育実践の観察や体験を通して学ぶべき保育のポイントを実習生に説明する。その際、記録記入の参考例なども示し、その上で実習生が実際に記入してみることを試みる。しかし本学の場合、大学の中に付属園を持たないこともあり、様式11、12、13、14などは、日常的に見学などして書いてみるということが難しい。そのため、様式12『見学・観察実習用記録用紙』は、外部施設を見学した際に実際に書いてみる試みを行ったりもしている。その他、記録用紙を直接使用するわけではないが、自己の「内的体験」を言語化する試みとして、実習指導以外の授業（演習）を利用し、具体的事例に触れ、自分の感じたこと考えたことを記述しディスカッションを繰り返すという試みも行っている。

実習前に実際に書かせて比較的丁寧に個々に指導できた記録様式については、今回の調査でも実習生が「記入しやすい」と答える傾向があった。様式12、13は日々記録する様式にも拘らず、そうした試みの体験不足が「記入しにくさ」に結びついているようである。現在は実習記録の指導をもっぱら実習指導教員のみで行っているのが現状であるが、例えば、一つの工夫として、保育内容の5領域にかかわる教科担当者がそれぞれの教科教育の中で現実の実習や実習記録を意識して教育を行うことができれば、実習生の実習記録に関する体験学習も積み重ねることができるのではないだろうか。

実習記録は始めから豊かに書けるものではない、また始めから豊かな気づきを得られるものでもない。それぞれの学生が、それぞれの学びの段階に応じて可能な表現をし、気づきを得られればよい。そうした無理のない学習過程の中で、学生が「記録」の重要性、特に、気づきや学びを意識化することの意義を少しでも自覚し、保育を見つめ直す機会としてもらえれば、まずは実習記録の役割は果たせたと考えてもいいかもしれない。

実際、「始めは本当に大変だったけど、将来、振り返って見た時に大切なものになると思う」と語った学生がいたが、それぞれの学生にとって、まずは「自分の大切な足跡」と感じられるものにして行くことが課題であると思われる。

実習生と実践現場と大学それぞれの立場から実習をふりかえり、実習生自身の主体的学習が展開されるような実習にしていくために何ができるか検討を重ねることが大切である。また、それだけでなく「実習指導」を超えて、実習を通じた体験が保育の本質の伝承と創造の課題に

もつながるよう検討を重ねていきたい。

6. 要約

本研究は、実習園の保育士と本学の実習生を対象に、実習記録様式の「活用しやすさ」についての質問紙調査を行った。調査内容は①「活用しやすさ」についての5段階評定と②評定理由についての自由記述、③各記録様式についての修正・改善案からなる。実習園の担当者と実習生の回答をそれぞれ統計的に分析した結果、全般的に「ふつう」以上の「活用しやすさ」であることが明らかになった。ただし、日々の記録として用いる様式12『見学・観察実習用記録用紙』、13『参加・指導実習用記録様式』の「活用しやすさ」は、実習園の担当者と学生で異なる傾向が見られ、実習園の担当者は「活用しやすい」と回答をしているものが比較的多いものに対し、実習生は「やや活用しにくい」と回答しているものが多いのが特徴的であった。またその理由について自由記述の内容を分析したところ、実習生は「気づき、学び、考察」などの「内的体験」の記述をすることに難しさを感じ、意義を十分見出せないでいるのに対し、多くの実習園の保育者は実習生の「内的体験」の記述を実践での学びとして重視していることが明らかになった。この結果について検討し、気づきの得られる実習にするための実習記録指導の工夫について考察した。

7. 謝辞

実習および調査にご協力下さった実習園の先生方と実習生の皆さん、実習指導訪問に当たってくださった本学保育学科の教員の皆様と日々ご協力くださっている職員の皆様に心より感謝いたします。

8. 文献

- 1) 幸順子・秋田房子, 保育実習における記録様式作成の試み(第1報). 名古屋女子大学紀要第52号人文・社会編, pp.101-112, (2006a)
- 2) 幸順子・秋田房子, 保育実習における記録様式と手引き作成の試み. 全国保育士養成協議会第45回研究大会発表論文集(広島), pp.902-903, (2006b)
- 3) 幸順子・秋田房子, 保育実習における手引き作成に関する研究. 名古屋女子大学紀要第53号人文・社会編, pp.197-209, (2007a)
- 4) 幸順子・秋田房子, 保育実習における記録様式作成の試み－実習園へのアンケート調査結果から－. 全国保育士養成協議会第46回研究大会発表論文集(鹿児島), pp.72-73, (2007b)
- 5) 幸順子・紀藤久美子・秋田房子, 保育実習における記録様式作成の試み－実習園および学生へのアンケート調査結果から－. 全国保育士養成協議会第47回研究大会発表論文集(函館), pp.62-63, (2008)
- 6) 二階堂邦子編, 菅田栄子・福田理文ら著, 教育・保育・施設・実習書. 建帛社, (1999)
- 7) 小林育子・長島和代・権藤真織・安齊智子, 幼稚園・保育所・施設実習ワーク. 萌文書林, (2006)
- 8) 相馬和子・中田カヨ子編, 幼稚園・保育所実習 実習日誌の書き方. 萌文書林, (2004)
- 9) 宮里六郎・古庄範子, 保育に生かす実践記録－書く・話す・深める－. かもがわ出版, (2006)
- 10) 佐藤学・秋田喜代美訳, ドナルド・ショーン著, 専門家の知恵－反省的实践家は行為しながら考える－. ゆ

みる出版, (2001)

- 11) 中村雄二郎 臨床の知とは何か. 岩波新書, (1992)